大神宮九番

四

内閣文庫
和書
三二の六九
三九二
一五二
一七架

内閣文庫
番號 和 325627
323
冊數 394
函號 152
121

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

享保四亥年十月十八日

小林田兵衛昌貞致願

小姓組酒井大學支配

宝永六丑年五月　日跡目

大御番松平十郎守組　八百石　小林田兵衛邦昌

享保十二未年四月朔日隠入宗碩七百歳

支配

享保十八丑年六月六日死罪ニ成

享保四癸亥年十月十八日

清水依為 正保勅願
小堂法組瀧川渓後寺支院

享保三戊寅年十月十九日京都

大門書松平上野守組 高二百石 清水汲文帝陵

改仍為

改文帝陵京大坂の宿所等事

元文二乙巳年二月二日大門書組改

元文元未年七月朔日坂の清水に第八清水白浪十郎時後二

寛保元酉年七月廿日評定所小

石こうれて堺奉行関門記を負ふ事
書記酒井紙中守再度中分検分
に出ハせ一に付酒負さるゝを
り出せ一事門役役を勤ル
せんるのさとて家地さし出
奉ル事ハ伊と稲生下野ハ武
ハ芝へて五百二十石を収らる事ハ家地
を

享保四亥年十月十八日

大御書院番下野守組　元大坂御弓奉行　陶右

久保三百石　小姓組有馬門脇支配

門二百俵

久保三百石　勝貞

勝貞京大坂の宿番に成る事
度〳〵

享保十八丑年七月九日老辞賜黄金二枚入
建部民部少輔支配

元文四未年三月十日死八十歳

享保四癸亥年十月十八日　山田長右衛門　亜保吉之

小笠原組藤川渡殿手元

宝永六丑年十月廿三日家督

大御番松平七郎右衛門組　三百石　山田織部亜秀

亜秀京大坂の宿亜小者る事

度々

享保十七年二月四日青山の火災

あり市谷新宿村に及所此

郭新宿に及にうつる

享保十一年年三月廿七日小倉御番

の時安部豊後守殿

享保十二未年秋坂城の法橋小
弟を御使僧として勢州
享保十又戌年甚二条城の警衛
に参り吊拂役と勢州
寛保二戌年甚二条城の警衛小
弟を御使僧として浜松藩
延享二丑年又月晦日老僧賜黄金二枚
十次帝支配
宝暦十二午年正月廿七日死九十歳

享保八卯年十月十二日
松平右京亮次保逝願
小笠原佐渡守馬代拝受
享保八卯年十月廿六日御用
大御書小坂僧中守組 六百石
松平長門守一次
改政彦
一次京大坂の宿亜小弟の事
度々
享保十一午年三月廿七日小倉御料
の浮駄馬を勢州
寛保元酉年八月又日大御書組改
寛保二戌年二月十又日坂城の
法橋小弟子八法橋二枚

[illegible]

延享二丑年秋坂城ハ[illegible]

寛延元辰年夏二条城の宿直

に[illegible]

寛延三午年六月十九日辞入筒井

内蔵支配

宝暦元未年閏三月三日致仕

同年同月廿三日髪を剃る

寛政二戌年九月十一日死

享保八卯年十二月十八日　山角義之帝之明出願

小姓組能役出雲守支発

享保二戌年五月九日添目

大御番小姓組中守組　五百石　山角義之帝改明

改明京大坂ハ宿直に[illegible]る事

度々

享保十一午年三月廿七日小倉門特

の時歩行御免を願免

享保十八丑年七月廿六日死　五十二歳

享保八卯年十二月十八日

拾本次郎 重左衛門
小姓組 能勢出雲守支配

享保二酉年十月二日跡目

大御番小姓 伊中守組 吉田左右 拾本次郎 改四

享保九辰年 箕二条城の警衛

享保十一午年 正月廿八日 西丸新御書院番

同一番組

享保八卯年十二月十八日

柳原七郎左衛門

小普請組曲渕十郎

享保元丙子年十二月廿五日隠居

大御書小姓組中守組　四百石　柳原平七郎忠雅

忠雅京大坂の宿迄送る事

度し

宝暦二申年正月廿日於大坂城死

大御書小姓忠雅と大坂出府村寿光寺

小送葬

享保八卯年十二月十八日　窪田左衛門久豊病死　窪田三左衛門久豊跡　小姓組安藤主殿左衛

享保巳年八月廿日家督

大御書小姓役中守組　三百石役　窪田左衛門久豊

久豊京大坂の警衛小番の事度々

元文二巳年十月六日大御書組改

元文四未年七月朔日坂衆

清水小番八御使番兼帯被

仰付　乾十月朔日病死

あり

寛保二戌年夏二条城の警衛

条々

延享三丙寅年秋 坂城の法橋小
条々

寛延元辰年 夏 二条城の宿坐
に備ひる

宝暦元未年秋 坂城の儀式に
条々

宝暦四戌年 夏 二条城の警衛小
条々

宝暦七丑年秋 坂城に法橋
条々に病ひて

宝暦八寅年七月 於大坂城 死去

六十四歳

久豊こう歳と大坂天王寺町乃
風林寺に送る

享保八卯年十二月十八日

深津表兵衛ノ伝伝書ヲ
小笠原佐渡守ヶ家

大御番小姓組中守通　三百俵　深津次郎兵衛正利

正利京大坂の宿所にあるの事
度〳〵
享保十七年二月十日市ヶ谷加賀
屋敷の邸教史にうつる
同年五月六日市ヶ谷加賀屋敷の
邸御用なるよりにて御用ヲ
ヲ〳〵てなる九山所於伊勢守う

上ヶ地のうち冨田と称する
享保十一年三月廿七日小倉市将
の時出羽樂子と称先
宝暦七巳年三月廿日老耄賜黄金二枚入
川口藩登守支配
明和七寅年正月廿一日死八十歳

享保八卯年十二月十八日
西尾忠亡市長久恵子
小笠原廻真侍藩登守支配
享保四亥年九月六日病
大阪書小笠原中守組 三百俵 西尾基盛長利 改三百俵
享保九辰年最二条家の臣云常に
系ちと
享保十一午年三月廿七日小倉市将
享保十二未年秋坂城の臣云常に
の時出羽樂子と称先
享保十三申年九月三日於大坂城左右死四十歳
系ちとして病あて明の

長利の儀を掛列生玉の齡等
に送る

享保八卯年十二月十八日

戸田中左帝宗真殿
小笠原延貞洋熊壹守殿

元徳元未年十月二日源日

大御書小場佐渡守殿

戸田中三帝忠章

忠章京大坂より江戸に参る事
十一度
享保十一午年三月廿七日小倉御持
の時歩行御供を勤し御組之
席を定と賞
享保十二未年三月十八日浜御殿地
めぐり大的稽古を(きうこを)

勅命方い先さう旨令服ゆゝ出すき
仰せとあること
同年七月廿日吹上にて大的二本射
御流の射手に列して勤りあり
なる旨と大御番方にて先て御流
ゐれ御前に召て時後と言ふる
享保十四年己巳九月廿八日大的六本射
御流の射手に列し皆中なれハ
時後と言ふる

寛保元辛酉年八月廿日大御番組頭
寛保二戌年二月十五日二条城の
警衛に御ふ年旦六御服ハ時後に
時後と言ふる
と言ふ是ハ是ハ左衛門度無ふ
世無揚あること
延享二丑年秋坂城の宿番ふ
ふること
寛延元辰年夏二条城の宿番
に年り病ひめゝ
寛延元辰年八月十五日於二条城
死日十六歳
忠章ハ幼京於大宮寺妙蓮寺
ハ葬ル玉泉院ふ送ふ

享保八卯年十一月十八日

享保元年四月廿六日暗

加賀侍従中将組　六百石　加賀平六郎忠方

加賀侍従忠明卿

小笠原組真澤孫兵衛支配

改俗名

忠方京大坂の警衛小番の事

三度

享保十一年三月廿七日小倉帯刀

享保二十卯年三月十日新御書番倉橋内匠組

の出立を命ぜられ勤めを勤む

享保八卯年十二月十八日

秋田左兵衛督藤原忠厚

小笠原佐渡守長純

宝永六丑年九月晦日跡目

大井肥前小坂侍中守組　二百俵

享保九辰年七月二日於二条城死　三十三歳

宗心浄雲院へ送る

享保九辰年閏二条城に宿直

年寄に病あり

忠厚より暇を乞ひ京五條の舎の浄土

享保八卯年十二月十日石祖父帝崩

享保九辰年正月十四日

仁科次郎之帝信濃
小笠原佐渡守長高ノ支族

享保七寅年十二月廿五日御月

大和守小笠原佐渡守祖 二百俵 仁科次郎之帝信辰

信辰京大坂の警衛ふ事ふる事
十一度
享保十一年三月廿七日小令所得
の時歩行御子と称ス
享保十八丑年秋坂城の警衛ふ事
宿別と称ス
元文二巳年麻布の邸新次ふうふ

寛保二戌年閏二月大坂の惣奉行小堀
御奥役を勤む

寛延二巳年十二月三日大坂御奥役を勤
同年同月十五日御暇英令一枚時後に
之を賜ふ

明和元申年七月十日辞入後楽
寿十郎支配
同年十二月十五日死六十六歳

享保九辰年十月九日

享保八卯年九月二日遷

大御番小堀伯耆守組　七百五十石　天野傳之丞富房

天野傳蔵房規重然ル
小堀伯耆組瀧川播磨守支配

富房京大坂の宿駅に差遣
享保十一午年三月廿七日小令御持
の時駿河馬と称す

享保十六亥年六月廿九日御書付御小性組
瀧川播磨守組

後傳富

享保九辰年十月九日

肥後源藩保近想願

小倉藩細松野八市兵衛支配

大御書小姓後中守組 再勤 二百俵 後三百石俵

肥後源四郎保繩

保繩京大坂の宿迄小姓の事度々
享保十一午年三月廿七日小倉御門番の
時歩行御供仕ると相先
享保十七子年正月二日源四郎三百石
俵を以て扶二百俵ハうえ〜奉る

寛保二戌年十月十八日於二条城死 平八郎
保繩ゟ暇を京ゟ三度西へ数度

享保九辰年十月九日

大和守小笠原佐渡守組 再勤 二百石

近藤源之丞 改 吉兵衛

近藤三次郎 正長妻子
小笠原組松野八郎兵衛支配

正勝京大坂代官並に諸事奉行
享保十一年午年三月廿七日小倉市郎右衛門の時出奔逐電

延享三寅年十二月廿九日 病入 松平加賀守支配
延享四卯年六月十七日死 六十六歳

近藤

享保九辰年十月九日

内藤助之進重玄無願
小笠原縫殿頭松平長次郎殿死

元禄六酉年七月十日遊月

大御番小姓役中守組 現米八十石 内藤長次郎殿之廉

之廉京大坂其他遠国小番の事
度く
享保十一午年三月廿七日小倉御番
の時出奔仕る者先廉ニ付
実留一疋ハ元人ニて実留一疋ハお徐なり
四月二日大御番
常に御供仕りさに出奔小倉御番
の時他法ふさとの作と為もて

是之庶うなせし所なり

元文四未年秋坂部の法華堂に病みて

元文五申年二月廿日於大坂城死年九歳

之庶の願と大坂小橋寺所ゟ

傳長寺に送る

享保十乙年六月廿八日

小十人組吉野甚蔵信有家

小十人芳賀権蔵組

大御書小姓伊中守組　石俵　吉野左仲信積

同日先に小十人組に入る者は

撰養の御庭のさるるめてり八歳

大御書小姓に召られ

勢れうち石俵と

三度小十人組に入る者一年ゟ

伊さこあらん事エ

例にてこひを法とけ

（附小十人の役部をしから引て先大御書に入る者りるにけり）

（一度小十人組に入る者一年ゟ是いまそこ事ゟ

伊さこあらん事エ

例にてこひを法とけ

先小十人組の役なる者

なれハ其ゝ事とて出しかりんはハ云う決
り事とて後ハなしかうは我う恨とうくほかはうり
神おうの平情ハかはるす猟者の送るとんこハ十人の敵なる志を
考ふうしてと死ふ事ハもと　上へ出て神おうはかはるうちハ英ゆ
にまきたてうの後ハかはるすとしてその
ハくにかなせ　にむうし　獻南の御代ゆてをう名
恵ゆてと号ハかはるしなりとうんしなるゆ伊ちりてかく
伊出さんしなりと云て久くさ
事なりと碑に出くまる

享保十一年三月廿七日小倉御狩
の時駆殺馬を勢む
享保十二年七月廿六日大的六本射
御流の射ふれ列して　是大御番始て御流ゆ　諸中
なるまとハ御初ふ石さんて時彼ニ
と云ふ
享保十四年二月晦日弓場始の

三度ゆの射ふれ列して　是御番元て加(ゆ)　てハ　是なゆ
諸中なるハ御初ふ石さんて紀事
そゆる時彼ニと云ふ　是ゆ　明月　六日
宮中小石さ　黄金ニ枚と云ふ
享保十四年正月十日御弓場始
の三度ゆ御流射ふ列して
諸中なるハ時彼ニと云ふ明月
十二日宮中ニ石さんて黄金ニ枚と云ふ
享保十六年正月十日御弓場始
二本射　是二本射の　御流の射ふ列して
時彼ニと云ふ同月十八日宮中ニ
石さんて黄金ニ枚と云ふ

享保十六亥年九月六日任叙
新御番小姓
平岩清組

享保十七年十月廿日

御番小姓
御馬預田中主殿元陳兵庫
組 二百俵 田中元吉 元陳

元陳京大坂の警衛に差遣
度し
享保十一年三月廿七日小倉御番
乃時駿河馬と称し
延享二年六月十一日叙任 出奔

享保十二未年三月廿七日

小坂孫左衛門雄重殿
小菅藤組小男兵衛殿

享保六丑年十月十日添目

右御書小坂伊中守組　千石　小坂助次郎用雄

同年秋坂塚の様子小菅
享保十六亥年裏二条塚の様子
手当

享保十六未年六月廿九日沙汰書　御書院番大久保
豊前守組

享保十二未年三月廿七日

青柳勘兵衛一映典願
小笠原組宮崎七郎兵衛支配

西徳四年年七月二日病死

大御番小笠原中守組　四百七十表　青柳四郎兵衛義定

四百俵

義定京大坂ハ勤番清水屋

享保二十卯年八月廿六日死　四十六歳

享保十二未年三月廿七日

加茂下鴨光平勢願

小笠原縫殿助丹波守義

享保十一午年十月二日添目

大和守小堀伯耆守組 三万石後

加茂下鴨光隆

延享四卯年八月廿七日 新庄備高山安房守組

光隆京大坂其外堺奈良等の事

国立公文書館
National Archives of Japan

享保十二未年三月廿七日

石川市蔵ノ一段書ヲ
小美濃組吉本蔵ノ支配

享保巳酉年十二月廿七日踏絵

大神宮小坂傳中守組　三百俵　石川源次郎一明

一明二条城坂城ハ宿迄ハ年々
度々
享保十七子年十月十三日大砲六挺射
市流の射手に列して皆中なれ
時彼ニ文を送る

文政四卯年九月十日大坂御弓奉行
同年十二月朔日御服美濃一枚時彼ニ

寛延元辰年十月六日於大坂
宿舎死四十二歳

享保十二未年二月廿七日　行丹新発心　空敷道願
小姿徒組建部式部藤支配

大御番小姓組中守組　内表三百俵　須田次郎右衛門　改新発心

元文二年八月十四日　空阿京大坂宿出家
元文四未年七月八日死六十八歳　辻野吉之丞支配

享保十四己巳年十二月廿三日

加茂左京則明養子
小姓組久留島教馬支配

享保十七壬申年五月廿七日隠居

大御番小姓組中守組　千五百石　加茂伊織則恒

則恒京大坂ハ宿番ヲ勤ル
病ゆゑ隠居ス

享保十八癸酉年七月九日辞ス　福島左衛門支配

享保二十乙亥年五月九日死

享保十四己年十二月廿六日

表向之儀ハ定利喪ヲ

小堂修組福島左衛門支配

享保十四己年七月官濟

大御番小姓組中守組

五百石　森宋女定質

定質京大坂ハ宿亟小年ヲ事

度〳〵

延享二丑年六月廿六日死ニ十三歳

享保十四己酉年十二月廿三日

冨永久兵衛守信忠子
小笠原組建部氏数神支配

享保十五庚戌年三月十日跡目

大御番小姓組中守組 四百石 冨永権次郎能薫

享保十七壬子年三月十六日新御番高五百石御

但

享保十四己酉年十二月廿三日

出雲国雲州帝陳設願

小笠原佐渡守殿水野壱岐守殿

享保十一未年三月分晴

右御書小笠原佐渡守殿三百七十俵

出雲国市左衛門陳設

改雲州帝

陳設京大坂の宮座に系る事

三度

延享元子年十二月十二日新井豊前守殿

組

享保十四己酉年十二月廿三日

大河内長寅門 秀政三男
小笠原佐渡守様家臣助之丞

享保十七壬子年十月三日分知

大河内備中守組 三万石 大河内長三郎 改純

改七郎寅門

政純二男堀の壁隠小者の事一度

元文二己巳年十二月廿四日西丸御納戸

享保十四己酉年十二月廿二日

坂部貞文所宗陽寺子
小姓信組建部氏部補支配

享保六丑年閏七月十一日隠居

本所書小姓信中守組　二百俵　坂部傳之丞信房

享保十丙戌年夏二条城の宿直
に参られしに病おこり

享保十丙戌年八月十七日於二条城五歳死二十
九歳

信房う骸を京都寺所五条寺
に送る

享保十四己酉年十二月廿六日

寛田備中守帝ニ永免願

小笠原佐渡小出信濃支配

享保十四己酉年八月二日病死

大神宮小路伯中守通　二百俵　寛田左平帝ニ武

改　不審

正武京大坂の宿迄小者の事

之元ニ

宝暦元未年六月六日大坂御番義有

同年七月廿八日法服差免一時後

と法号

宝暦七丑年十月廿六日御勘定吉行

一番同所守政沢う郎ニ寛田相模守

正亮朝臣仰ゝ付て御役に
為せさる事ハ小普請ハ入らぬ
筒井内蔵丞死ゝ
明和元甲申年六月廿一日死ス十四歳

享保十六亥年十一月廿六日

大御番小姓組 二百俵 蓮淨院殿御用人 依田左衛門 正利 嘉願

依田数馬正保

改 主馬 左衛門

元文三午年九月四日 於在住 掛方御納戸

正保京大坂ゝ為出に来る

享保十六辛亥年十一月廿六日

西丸新御番松本弥市兵衛組之者番定規表之

大御番小姓使中守組　二百俵　大谷助之進定改

定之改京大坂の警衛に手当

元文三午年五月　新屋住　榊方御組戸

享保十六年十一月廿五日

免新御書役屋平三郎組数馬昌全跡

大御書小姓使中守組　二百俵　多田三四郎昌邦

享保十七子年十二月廿四日新屋任

小又御右近習番

同日御役料二百俵と成る

享保十九寅年六月廿日新

御方代小姓中となる

元文三年年免されて入竹中

同防守支配

延享三寅年六月二日於尾州小書院
支配組
宝暦四戌年十二月廿七日跡目二百
平侯乾延の二百侯ハ今之一ものなる
明和五子年十月廿八日死ス十八歳

享保十六亥年十二月廿六日
市野物方尾張仁右衛門某願
大御書小姓組中守組 二百侯 尾張九十市某
改メ八市
享保十八丑年秋坂城の法令ハ終リ
享保二十卯年十二月廿七日於尾州任 追放
同日浄宗の所にて石されて父仁右衛門
悪事存せずとい(ふ)ことし父の事
なり(ま)ハ追放ハ腐せらるべき沿革
尾張浄宗利雄伝(ヲ)

享保十六亥年十一月廿六日

元方御門跡ニ被勅三條宰相殿被頂

右衛門督小路俊中守組　二百俵　三條殿七市宮之改

元文三午年十二月廿一日　於屋敷　被仰付

寛保元酉年二月廿六日　右衛門督左右

大和守組小入

宣改京大坂の宮殿に参ること

国立公文書館
National Archives of Japan

享保十六年十一月廿六日

大御番小堀織中守組　二百俵　野中富之助政甫

大御番衆川口徳守組番衆ニ改成ス

後　西丸番ニ

元文二巳年十一月廿二日親日々公御
寄物屋ヲ以て芝辺へ出御有て御休
御弁柄一反海黄縮一反を給る
元文四未年正月十六日御弓場始の
射ゆに候して時彼ニて時服同月
十八日吉中に召されて黄金ニ枚を給る

寛保三癸亥年五月廿九日父炎暑
と信濃守の料方ハ
遠藤と称す

寛延二乙巳年三月六日辞入金四兵衛安支配
宝暦七丑年七月廿一日死罪四郎

享保十六亥年十一月廿五日

大御番小笠原伊予守組　二百俵　宅間元之丞憲元
大御番酒井日向守組宅間元之丞憲喜二男跡
後三百俵　改織部

享保十七子年六月七日跡目三百俵
享保二十卯年八月廿七日西丸御腰物方
乞近ノ二百俵ハ

享保十六亥年十一月廿六日

大御番小姓組中守組 二百俵 後二百石 竹内文次郎幸廣 改 十郎兵衛

大御番小姓組基長 幸全 豊頼

享保十七子年十二月二日病死二百石

もとその二百俵ハこうえ一代

幸廣京大坂ノ宿亟小者

元文四未年三月八日御腰物方

享保十六辛亥年十一月廿五日

大御番松浦出雲守組番頭正種歿ス

大御番小笠原中守組　二百俵　後二百石　原田主殿正勝　後番頭

正勝京大坂ノ勤ヲ命ル事度々
宝暦六子年十一月晦日御目二百石
見近の二百俵ハ之ヲ奉ル

明和四亥年六月七日辞入　高力式部支配
安永二巳年十二月廿五日死　六十九歳

享保十六亥年十一月廿六日

大御書院番小姓組中守組　二百俵　後八百石　権左兵衛泰秋

大御書院番小姓組中守組　二百俵　後八百石　泰秋

享保十七子年三月二日病死　八百石

元文元辰年九月十二日死

国立公文書館
National Archives of Japan

元文元辰年二月二日

小宮山甚左衛門昌胤勘願
小宮山修理亮紹朽木修理亮発

享保二十卯年九月七日跡目

本郷酒井伯耆守組　七百石　小宮山平八郎昌勝

昌勝京大坂の宿番に今年の事
度々

寛延三午年八月五日死　三十五歳

元文元辰年二月二日

享保六丑年十月廿八日分知

奉行酒井伯耆守組　又四郎

柘植平八郎正富

柘植平右衛門兄正六男

小笠原信濃守組久留島数馬支配

後平八郎

同年閏二条城北宿亜小屋ヲ

元文二巳年三月宗旨ヲ改ル

元文四未年秋坂城ノ西云淵小屋ヲ

元文四申年八月宗旨ヲ改ル

寛保二戌年閏二条城ノ宿亜小屋ヲ

八月沙金信濃ヲ以テ大坂ヘ移ル

延享元子年閏代人ヲ以テ二条城

に参りて宿直す

延享二丑年秋坂城の警衛に参る

明年京の年病ゝて七月十八日死

延享四卯年九月十三日御小姓七番支配

宝暦二申年閏月廿一日死三十九歳

元文元辰年二月二日

享保二十卯年三月晦日御目

御書院番酒井備後守組

小普請組杉本修理支配

源義知

小普請組

源義知

改 主殿

次郎左衛門

金魔京大坂に宿直に参る事

宝暦四戌年六月十二日御書院番被仰付小普請入

同月二日主殿支配

同日松平宮内少輔忠恒朝臣の邸へ

召されて妻いよ母光壽院より

浅田惣次郎取扱ひ事若年ハ
病中ゆえ（こゝも）はつてねがうとも
あつ（きに）こゝ欠庵人等をきし
小男なる故浅田惣次郎を指添
ゆりて五押をもて荒乃事
妻女うつ和ゆか海を相きゝ事
石垣のくずをもつて御毒殺
さる（）小男結入用つゝ（）と作
出さる（）
こゝ後用門を免さる（）
明和二酉年八月冒致仕
安永四申年七月十一日死

元文元辰年二月二日

享保二十卯年有十六日家督

大御番酒井伯耆守組 四百石 三橋長右衛門

元文二巳年 月 日 隠入 能勢市十郎支配

元文四申年閏七月廿七日死 三十一歳

三橋右衛門成平養子

小姓組酒井飛騨守支配

元文元辰年二月二日

享保十七子年十二月十七日病死

大御番頭兼伯耆守組　旗本　小野三郎高良

小野授産高光書ス

小普請組秋元市十郎支配

高良京大坂の警衛に出張する事度々

寛延三午年七月六日大御番組改

宝暦元未年　月　日　坂塚の窟

に籠もり御いとま白銀十枚時後二

を給ひ御中陰なるまは活潑

なる欲望をいはと叶恩賜

あり

宝暦四戌年夏二条城の宿直に参る

宝暦七丑年秋坂城の警衛に参る

宝暦十辰年夏二条城の宿直に参る

宝暦十三未年秋坂城警衛に参る

明和三戌年夏二条城の警衛に参る

明和四亥年十月三日死

元文元辰年二月二日

享保十四酉年十二月二日跡目

大御番酒井伯耆守組　四番後　石原左兵衛義甫

石原左兵衛義方長子
小姓組柘植左兵衛理之配

後改　長義

同年夏二条城の警衛に参る

寛延元辰年夏

宝暦九卯年二月朔日大御番酒井大学頭

組入

大目付忠言帝之配

組入

元文元辰年二月二日

荒尾八三郎成精遺領
小笠原細川木下三郎左衛門之発

荒尾右源太成厚

三百石

内百俵

享保十一午年十月二日遺領

本御番酒井伯耆守組

成厚京大坂江宿座に系る事

成

延享二丑年六月四日大御番組入

同年七月朔日坂部の法令に

年月日不詳時後之

法令を見られ候と世無賜

国立公文書館
National Archives of Japan

寛延元辰年　葵二条御の宿
出に付
宝暦元未年秋攻降の結宿
宝暦三酉年　又月廿二日　辞入田中
出羽守支配
宝暦八寅年　九月十八日　致仕
天明七未年　正月十日　死　七十一歳

元文元辰年二月二日

享保十四己年　月　日　跡目

大御番酒井伯耆守組　三百俵　三橋長右衛門　正意

三橋長右衛門　正儀　長子
小姓組番頭　番頭　数馬支配

正意　京大坂
三度　宿近に付多事

延享三寅年十二月八日　御馬方
宝暦元未年　六月　日　辞入　三枝
宗四郎　支配
宝暦四戌年　又月十八日　御番　大番
弟　守組小入

元文元辰年二月二日

不老千之帝忠武卿
小姓後組大目付帝之亮

享保九辰年九月二日添月

大御番酒井伯耆守組　二百俵　石巻内蔵助忠總

改　弘前変
辰之藩

同年閏二月二日

元文三午年十二月八日

刑部卿殿迫習番

元文四未年正月十九日同御番

小性

延享元子年正月廿二日元組大御番

水野河内守組（帰参

元文元辰年二月二日

寛保七亥年十二月廿五日御目

大御番酒井伯耆守組　二百俵　森川孫七郎定見

森川孫七郎定見京大坂若年寄に系る事

宝暦三酉年六月十日大御番組に

宝暦四戌年二月十六日二条城若年寄に系る八月御帰城に付御後に付恩賜の

宝暦七丑年秋吸塩の法令

森川孫七郎重富養子

小姓組大番忠宮郎支流

条ニ

宝暦十庚辰年夏二条城の宿
直に参る

宝暦十三癸未年秋仮殿の遷宮
に参る

明和三丙戌年夏京都に饗応
参る

明和六己丑年秋仮殿の落成に参る

安永元壬辰年夏二条城の宿直に
参る

安永四乙未年秋仮殿に落成
参る

安永七戊戌年夏京都に饗応
参る明の京都年三月十四日
孝恭院殿に御法号を賜る
して実家に帰る為さ
時の京職久世出雲守殿明朝
はせ(らま)て同月十六日御発
道中人馬の御定文を賜ハる
京都を立て七日江戸小着
八月七日富士中に石これて此度の
事に労ハりとて黄金二枚頂戴
を給る

天明元辛丑年十一月十一日老拝黄金二枚

[illegible]と長谷川利十郎支配[illegible]
なる[illegible]
天明二[illegible]年[illegible]月[illegible]日死七十一歳

元文四[illegible]年[illegible]月[illegible]日

享保十八[illegible]年十二月[illegible]七日[illegible]

中川市郎兵衛忠真[illegible]
小[illegible]組[illegible]年三郎支配

大御番頭守組 [illegible]市古右七郎三郎[illegible] 中川[illegible]次郎忠平

忠平京大坂の宿[illegible]に[illegible]る

宝暦六[illegible]年[illegible]月[illegible]日死四十二歳

元文四未年閏月四日

家督相続仮野者之儀願

小普請組仮野者之倅

亨保十丙申年七月四日跡目

大御番番頭播守組 二百石 森本市右衛門貞勝

元文四未年六月朔日死 二十三歳

元文四未年四月四日

蜂屋三郎次郎正勝歟
小笠原組大名志摩守支配
改三郎左衛門

元文三午年七月廿六日家督

大御番久貝因幡守組 四百二十三石余 蜂屋勝之助正則

正則京大坂の警衛に常に在番して
年々七度宛に代人出して
年月て宿番する事なり
宝暦三酉年一流に金貸借する時
金二十万両と貸し渡す

宝暦八寅年十月二日大御番組改

宝暦十辰年二月十五日二番組に

宿屋に泊まりては清水白浪十時後
と云ふ事を見ること左書の度あり
世良陽あり
宝暦十三未年秋坂崎に結びに
来りて
明和三戌年葵二条城の警衛に
来りて
明和六丑年秋坂崎宿屋に来り
明和八卯年十二月廿三日和歌長田
秀次郎大罷とれて斬罪に
あたりて斬罪に
但し一流御初ふ初る事を止む

明の辰年二月廿九日発さる
安永元辰年葵二条城の警衛
に来りて
安永四未年秋坂崎の宿屋に
来りて
安永七戌年葵二条城の警衛
に来る
天明元丑年閏二月二日老侯英倉二
と法事を入宿久三郎方
天明六午年七月小田川江戸川
端の邸水戸ふ初へ倉四十面と
貸し一流

国立公文書館
National Archives of Japan

寛政五巳年六月六日死八十五歳

元文四未年閏月日

年号十歳云歌舞子
小倉藩組依野右之丞支配

本多小八市秀房

後十歳

元文三午年十二月廿七日跡目

大市書貢因幡守組

秀房京大坂の勤役滞小年の事
和歌山にて十九歳

宝暦十辰年十二月廿六日辞入田中出羽守

支配

宝暦十巳年十二月日大市書協

大昭元組小入

元文四未年正月吉日

井上伯耆守信敬
小姓信經
長屋長助支配

元文三午年二月廿七日跡目

大御番久貝因幡守組　三百俵　井上忠次郎正房

正房京大坂ノ警衛ニ勤ル

明和五子年七月十七日死　五十四歳

元文四年四月四日

元文三年十月廿七日添目

本丸番頭同心組 三百俵

岩部左之助忠顕跡願

小普請組元文年三番支配

岩部左之助忠通

改 弁記

元文年

忠通京大坂の勤番仰付る事

三度

延享元子年十二月廿四日元方御納戸

元文四未年閏八月

石川平蔵春繁跡
小普請組永井監物支配

元文三午年十二月十日家督

大御番久貝周清守組 三百俵 石川平次郎春忠

延享四卯年九月十三日隠入長谷川久三郎
支配

寛延二巳年三月廿九日死 平蔵

元文四未年四月四日

朝比奈三之丞義徳殿
小姓後組杉本丈太郎殿支配

元文元辰年十二月二日病死

奉行番頭同心橋寺組 二百石 朝比奈小次郎義永

後改助之丞

延享三寅年十二月三日元方御納戸

義永京大坂の宿並小姓衆

元文四未年閏月晦

石見多賀定時表子
小笠原組与力三市之死

大御番与頭同横守組 再勤 二百石 石見市之丞定愛

同年秋 改添番

寛保元酉年十二月廿六日 二百俵 吸嶋の宿亡ニ付

御番方御納戸

元文四年閏八月

元文三年癸未八月四日病没

太田備後守資晴寺組 二百俵 太田久五郎市蔵秀

右田新五郎信次男数度
小笠原組大番士市左衛

蔵秀京大坂の警衛御小番の事
三度

寛延三年十二月廿九日雇入 筒井内蔵
支配

明和六丑年十一月晦日致仕髪と
剃て松庭と云

天明三卯年七月十八日死 八十七歳

元文四未年閏八月四日

同役長崎奉行 小出信濃守 小笠原信濃守 依野吉之丞 文政

享保六丑年八月二日病死

本所書役同情手組 二百石 内藤源次郎正武

改法帝寺

正武京大坂北部公儀小手之事

度々

寛延二己巳年六月廿六日本所書組頭

同年十二月廿三日大塚久保町

於て居邸の地を拝領

宝暦元未年 月 日 坂部の

部公儀小手組 伊服 白浪 村

時後二条殿ヲ立ラレ公儀ト
世恩揚ケラレ
宝暦四戌年夏二条城の宮亟
に参る
宝暦七丑年秋坂城の法常み
参る
宝暦十辰年夏二条城の警常
に参る
宝暦十三未年秋坂城の法常ふ
参る
明和三戌年夏二条城の警常
に参る

明和六丑年秋坂城に法常ふ
参る
明和七寅年八月十日深川に
火災あり南本所二ツ目の邸
類火かゝる
安永元辰年夏二条城の警衆
に参る
安永三午年十二月廿六日死六十七歳

元文四未年閏八月四日

享和元酉年十月九日隠居

本丸書院番久貞周防守組　二百石　阪室勝之助当貞

阪室勝之助儀父伝蔵子
小姓組番頭左京亮勝之殿
改八郎兵衛

昌貞京大坂御番組之儀
度々

安永六酉年十月廿二日死亡

同日浄光院小石川にて当四月
閏八月九日島男八郎兵衛人をかたらひ
大禁を犯し大いま博奕を催し
二十年と存せず二月〜七日

妻の妹さく儀同〳〵六郎覺さ
八郎殿に伯耆をそうのさわらし
さき事ゆゑ〳〵導にうけて
八郎殿を頼に入る東松田
夏張帝吐毛全武方かりうみ
度中にうけて取さ次ぎ
要百次帝悪に中はのも義殿う
肩と見みし毎度中て謀止事
と得手張先て対面死骸持へ
入左義張へ引そうにうけ発亡し
事と中せは玉虫に中つきに
うれ見押うくしみ生一位

法小師紀四郎武一泙上の
ちなる引なし徒状を新
事中も士そうるの志に
あく決うけて生腐小屋せ
らるのもの松平對馬も忠郷
はくく又息男八郎殿を斬
罷に屋をくるるは二百石を
收らるて家絶さり

元文四未年閏月四日

元文元辰年十月廿六日遊月

大御番久貝因幡守組 二百俵 石川門通忠良 改名長門

石川長門法華経
小美濃細流姫市十市支流

忠良京大坂の郡山藩小笠原
度々
元文四未年二月十六日四ッ谷の邸
自火にて焼失ぬ
寛延二巳年夏代人にて二条城
の郡山藩小笠原の留守居に明の
寛延三午年四月二条城の番衆

に在し同僚板倉左兵衛尉の事ハ実直にて副を命せられて奉行に府にて
勤仕し戸田小平次清井義十郎本多
十郎こゝに忠良に人にて
月廿三日嘗中に死去
板倉左兵衛尉ハ副りて
労功ありしの仰を蒙りて石浪十枚
を給ふ
宝暦四戌年夏二条城の警衛ハ
こゝに渡辺孫兵衛と共に免

新見代て免ニ付同官金を使
し明和の末年六月渡辺孫兵衛方
京外を以て玄米十六石五斗を
給ふ

明和元申年十二月廿八日雑人役栗山義
支配

明和二酉年八月日致仕露心と云
安永八亥年二月日死六十一歳
忠良父の業を受て濃流一刀流
乃剣術に奥義を極む

元文四未年四月晦

長尾筑三郎京忠貴子
小姓組永井監物支配

享保十三申年七月十二日遊

大御番久貝因幡守組　二百俵　長尾筑助京忠

改筑篤

京東京大坂の警衛小番の事

九度

寛延元辰年筑二条城の宿番

番ゆ御合力金信而ニ〆て大坂へ

宝暦元未年秋坂城の警衛に

番ゆ御役目ゆ之勤む

宝暦四甲戌年 夏二条城の護衛ふ
為ると称して役を免じむ
宝暦九卯年十二月十又日 宿直
十名せうけんと上の勢めなる事ハ
少なくて黄金一枚を賜る
宝暦十二午年二月十日 實母方
叔父 百人組の与力 松平軍次郎 細井
文三郎 江戸詰になりしこと
同月十四日 宿直と出られる事として
追ふられる三月又に免さる
明和四亥年十二月十六日 大御書組頭
明和六丑年七月朔日 坂塚れ

禁裏警衛ふ為ハ御服 白銀十枚
時後ニ賜ると見られ
恩賜ける
安永元辰年 夏二条城の宿直
に為る明の
安永二巳年 三月十日
禁裏警衛ふ為の御うかゝ
せられて
民部卿殿ふれ御使を勤む
同年又月十日 お書付ニ屋敷
を流ふ廣せられハ同月十三日
同役一統御礼に出る事と出る

ら月六月二日崩ぜらる
安永元年秋坂城に行幸あり
安永六年十月廿二日相模
坂室八帝崩ぜらるるに付て同坂
一流龍顔をへ出仏さる
十月廿一日崩ぜる
同年同月廿二日坂室八帝崩ぜ
ぜられ小廣せられ事に付て
同坂一流御所に出る事と止る
ら所に光宮殿ハうくいそして仏ゐ
さる叶京小廣のうへ仏され事
十二月十一日崩ぜさる

安永七戌年葛二条城の宮迎
に行幸
天明元丑年秋坂城に行幸
あり
天明四辰年葛京に濃小行
天明七未年秋坂城の新宮小
行幸
寛政二戌年葛二条城に宮迎
に行幸の
寛政三亥年二月四日新造の
内裏へ　遷　幸
仙洞

女院　新殿（うらせのうに
うつりて
宮門鄉殿うつりて御使を仮
布衣あり　法皇同月廿
又　勅諚とうけたまわりて
にうつりて布衣を著して
御所小系図
寛政三癸亥年六月廿三日老辭
是ヨリテ宇三年　黄金二枚を給ふ所なり
たとむ
弘和寺支配なり
同年十二月　剃入　八本十三帝う支配
中なり

閏月閏十日石高不出候

元文四未年閏月十日

寛田摂津守惠恵

小笠原佐渡守中周防守支配

享保九辰年十月閏十日遠州

大御番頭兼播磨守組　三右衛　寛田惠三郎惠喜

惠喜二条城の警衛に参る事

又宝暦城の警衛に参る事九度

安永四未年正月廿又日大御番組頭

同年七月廿八日坂城の警衛に

参る事八度十時彼地に

詰る事也　叶恩賜有之

安永七戌年春二条城の宿惠

に年月八　市茶もちみて
三月十八日より病ひ重り二日
より延して十四日に
安永七戌年六月九日辞入大病
会庫支配
同年七月晦日死六十歳

寛保元酉年十一月晦日

竹田丹波守政武卿
小笠原佐渡長行公三帝方発

空保十九寅年二月三日晦

大御番酒井雅中守組　八番　竹田義蔵政貞

政貞は死享保二十卯年に
宗地の用を弱り家僕を
公事ばかりの命令
うけを仕ふの間に服を
出しる事にて追籠
らるる故支配
その子にて大御番に入る事と
いうなり少へ小やとなる

父八叙爵せしに

改貞京大夫の孫云説小系有

宝暦二申年八月十七日死 年十一歳

寛保元酉年十一月晦日

小笠原久蔵の弟貴子
小笠原紀北系初養子死

享保十卯年九月七日婚

大御番酒井雅楽頭 七百石 内二百俵 小笠原太吉正術

延享四卯年十一月廿八日 稱入 金田宗女支配

明和元申年十一月廿一日死

寛保元辛酉年十一月晦日

小野豫高則正養子
小姓信濃河内守伊織支族

享保十二未年十月官跡自

大御書頭并紙中守護　二百石　小野豫高族

高族京大坂の警衛に当る事十度〳〵

寛延元戊辰年夏二条城の警衛

に当る〳〵時御茶壺の長副

と勤む又月十一日家を立てこの事

此勤年勤

宝暦十一乙巳年八月三日死五十歳

寛保元ゟ年十一月晦日

寛保元ゟ年七月廿日迄

大御書簡井就中守組　四番　寛田織部正殿

改　又奮門

正殿京大坂并富士ゟ年ゟ事

度々

宝暦三ゟ年九月廿六日死ニ十二歳

寛田又奮門　武蔵

小笠原組長谷川久三郎支配

寛保元酉年十月晦日　内藤若狭守之廣知行
小笠原佐渡守長年之所領

元文五申年三月六日浜田

大御番酒井雅楽頭守組　深尾八右衛門　内藤新左衛門之周
改名

之周京大坂代官並に弟の事
度し
寛延三午年八月廿三日いせ居郷
なりに八日ッ谷内藤宿六軒町
ゆて居郷の地を給ふ

安永二巳年十六月十七日死　六十一歳

寛保元酉年十一月晦日

三宅次右衛門 正英妻子
小笠原但馬守殿平三郎支配

元文四未年十二月二日病没

本所書濱井紙中寺組 二百俵 三宅指右衛門正久

寛保二戌年九月廿八日死罪家

寛保元酉年十一月晦日

八幡宮宮司改春盛願
小笠原組永井監物支配

寛保元酉年閏八月晦日

大神宮酒井紙中守組　二百俵　八重盛兼四郎教道

改　新次郎
六郎

教道儀京大坂其他諸国に参る事
度々
寛延二巳年閏十九日四方敵文
小宮山新右衛門獄屋に参る
三月
十九日新右衛門仕置になる八

[illegible]

天明元辛丑年十二月七日老病賜黄金拾枚入
天野山城守支配
天明七未年七月廿九日死七十二歳

寛保元酉年十一月晦日

板花友之進昌敦歳子
小姓信組阿部伊賀支配

寛保元辛酉年 月 日病死

大御番酒井紙中守組 百俵 板花六三郎昌真 改 友之進

同日習れうち百俵を足しの
仰せあり
昌真京大坂勤番仰付られ
寛延元辰年まで宿直に息を
なくして

寛延元辰年三月廿八日死

寛保元辛酉年十一月晦日

同浪合人義政妻子
小笠原遠江長川久三郎支配

享保十六亥年三月二日遊月

大井書須井弐中守組 二百俵 同瀬丹下義延 没 在番

寛保二戌年夏二条城の宿番

延享元子年九月廿日辞入 戸川内蔵助
支配

延享二丑年九月廿九日死 六十歳

寛保二戌年十二月三日

大御番酒井雲州守組　二百俵　新御番与力安藤組清左衛門弟泰蔵子　鈴木忠四郎泰望　後三百石　後五十

泰望云京大坂の宿亜代等の事度々

寛延三午年九月三日御目見二百石

宝暦四戌年六月九日死　五十一歳

その二百俵八返し　勘子

寛保二戌年十二月三日

大御番頭并城中守組　二百俵　小林哉之助正有　西丸新御番御保留置奮組孫三郎二男悪候　後年十郎

正有京大坂の宿番に参る

宝暦二申年十二月廿二日　於屋敷　任　西丸御納戸

寛保二戌年十二月二日

大和守藤原吉豊朝臣

大和守藤原吉豊朝臣

二日侯　青木左金次義英

改又右衛門

義英京大坂の宿直に差出す事

宝暦七丑年三月廿日　新屋任　西丸御納戸

寛保二戌年十二月三日

本所安本多左兵衛殿組與養母貞蓮尼

本所番頭井弦中守組　二百俵　清野傳之助満奏

後二百石内八十俵　後與養

満奏二条城ヘ宿直に罷る事

延享四卯年閏五月五日従弟彼初

與八郎流刑に處せらるゝ宿直

と止免らるゝ六月三日免さる

同年十月八日跡目二百石被下

二百俵ハうえ一敬孫

宝暦三癸酉年八月廿二日西丸御納戸

延享元甲子年正月廿二日

石巻千左衛忠武殿
刑部卿殿小性

大御番水野河内守組 寄合 二百俵 石巻次郎左衛忠総 改広善

延享二丑年七月十八日辞入 松下加兵衛支配

安永八亥年八月四日致仕隠居と云

寅政二申年正月廿四日死 七十又四歳

延享四卯年四月廿九日

小侯次郎兵衛殿 西長崎頭

小堂信濃大目忠宮帝支配

大神宮祢津誠中守殿 再勤 二番三番

小侯次郎兵衛殿 来

役 平太郎

組 延享四卯年八月廿七日 新井喜多郎 根岸茂兵衛

国立公文書館
National Archives of Japan

延享四丁卯年四月廿九日

山下治三郎義旭養子

小姓後組行中周防守支配

寛保元辛酉年七月廿六日病死

本所番衆深瀬中守組

二百石

山下三之助義里

改治三郎

義里京大坂若年寄小姓勤

宝暦十三癸未年七月十七日拜入有馬家女

支配

安永七戊寅年八月九日致仕

寛政元己酉年二月二日死

延享四卯年四月廿五日

延享元子年十月二日遠国

大和国郡山城中守領　二万石　小林隠十郎正儀

小林数馬正常跡願

小笠原佐渡長行久三郎左衛

役　侍十郎

三郎左衛

正儀京大坂乃勤元陽小番乃事

度〳〵

宝暦四戌年夏二条城の宿番小

番乃ことに明の

宝暦九卯年二月十八日京蔵酒井

讃岐守忠用朝臣乃邸小石さんて

江戸表へ参上仕候ハ、
寺社奉行へ申渡し
江戸表へ参上仕候ハ、
あ川ハ
そ
ふ
十月
豊国社
山門
こ
時後
同月
宝暦九卯年十二月十四日宿免千石
せの内ハ
黄金一枚
明和六丑年九月
山陵新
出来
うち
十二月十二日
明和八卯年八月六日大坂御奉行
同年十月
時後
黄金一枚
安永六酉年
月
日
家に
来りて
箱書を
こうるゆふ
大坂

年かはさるべハ
安永六丁酉年十二月廿四日病死のうへ
免さるべき旨奥田英法守支配となる
天明七未年十一月十七日死六十七歳

延享四卯年四月廿九日

馬場右八郎義長跡願
小笠原廻全書岸女婿

寛保二戌年七月廿六日家督

大御番并浅草御中寺組 馬場右京亮信盈

信盈京大坂の警衛ふ為年年
元旱ニ年参ゐ二十日ゑ
年ゐ
参ゐ
ゑ在役と十ゐ
ゑ

役三番番

寛政三亥年十月廿四日病死 石河土佐守
支配

延享四卯年閏十九日

寛保二戌年七月二日薨

大御番若狭守中守組　三百石　筧周防守信正

改　主水　小十郎

宝暦三酉年三月廿一日新御番根岸兵部

組　信正弟大炊介宿直

筧周防主水信房無願

小姓長谷川久三郎支配

延享四卯年閏十月廿九日

延享三寅年十二月六日家督

大御番番頭 板倉源太郎重賢

小普請組戸川内蔵助支配

中奥小姓 三百俵 板倉左太市重

寛延元辰年閏二月家督の翌年

寛延三午年六月十二日中追放

同日評定所にて吟味ありて父盤所

流刑に處せらるゝに中追放に處

せらるゝ故仰出されて家絶て

三百俵を収らる

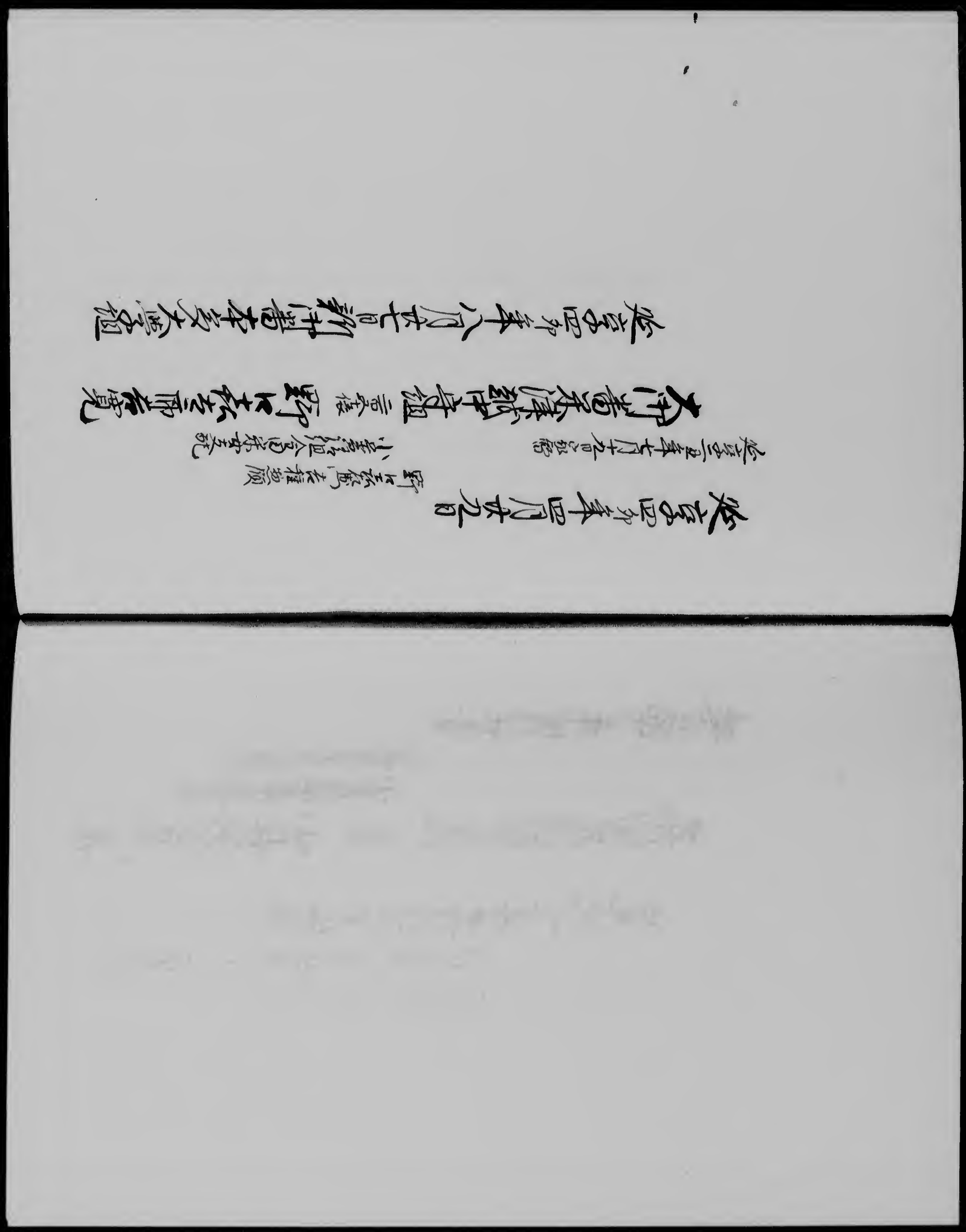
延享四卯年閏十月廿九日

小長谷七郎兵衛尉朱勉願
小笠原縫殿頭家女支配

本間筑後守殿　三而侍　小長谷源右衛門　栗

寛延二巳年十一月廿七日出奏

源右衛門栗出奏〳〵て家絶て
三而侍と成らるる



国立公文書館
National Archives of Japan

延享四卯年四月廿九日

秩父三郎忠明勘顔

小笠原紀伊守殿七郎支配

延享元子年四月四日遊月

大御番組頭中守殿　二百石　秩父主水忠清

改三郎

宝暦六子年十二月廿八日辞入金田主殿支配

明和七寅年十二月六日致仕

安永二巳年十二月二日死六十三歳

延享四卯年閏廿九日

水野忠邦近貞出願
小姓侍組御中間頭守之祝

大御番並浦賀守組 再勤 二百俵 水野主殿頭近久

改 神宮

宝暦九卯年八月廿四日西丸御納戸

近久京大坂の宮殿に奉仕

延享四卯年閏十二月廿九日

大御書茶湯紙中守護 再勅 二面石 加賀立願家傳 改長邦

加賀門跡家忠無願
小笠原細川伯左家立免

寛延元辰年葉二条殿の宮様
御病むゆえ明乃年
寛延二巳年二月七日於二条城 左衛死

寛延三年八月十日

松浦左衛門親兵衛
小姓組奥田八郎左衛門

元文元辰年十二月廿九日病死

大御番水野肥前守組　八番隊　松浦松之助満偶　没忠義

満偶京大坂の宿直に参る事
度〻
宝暦九卯年十二月十日十と申す
ゆゑ〻宿直上の智光なりとして
黄金一枚を給る

天明元丑年閏十月廿二日大御番組に
同年七月朔日坂城に詰番に

寛延三年八月十日

宝暦三年十月二日下総守組入

宝暦元未年秋坂塚の藩小名

宝暦九卯年十一月七日大井肥前守

天明八申年九月十八日死 六十九歳

天明七未年秋坂塚の藩小名

天明元辰年夏二条城の警衛小名

寛延三年七月廿九日家督

大井肥前守組 器量不足

水野肥前守

後改豊後

小笠原組松平壱岐守支配

佐木次郎改図書頭

後改豊後

佐木数馬政明

寛延三年八月十日

三浦庄蔵・忠輝勘頂
小笠原紀平治大学之助

寛延三年年号月日改元

大和国水野郡和寺領四石 三浦伊織忠重

改元変

忠重京大坂の宿亜に年々年
々宝暦寅年襲二条城の宿亜小
宝暦十三未年二月六日宮谷大雷
雨の火災ゆゑ市谷川田ヶ窪の
邸新火にうつる

明和六丑年秋坂塚の法師小弟
御遠忌に参詣致し病死
明和六丑年十一月廿四日於大坂塚左衛門死
亡骸を大坂天王寺寺町
龍徳寺江送る

寛延三午年八月十日

内蔵亮市郎正賢跡願
小姓組川崎左弟左兵衛

元文元辰年十月信濃守跡目

奥御小姓水野肥前守組 同心 内蔵亮正任

改 主税 内蔵亮 豊前

正任京大坂に居住小弟の事殺
宝暦元未年二月廿八日いせと居邸
なりられ居邸を居て不足
毎年伺を願
宝暦三酉年八月八日小島若狭
台御くに水野甲斐の上ケ地を居

郡の地に移る

宝暦九卯年十二月十五日十五夜の
月明に宮亟上の物見るれハとて
黄金一枚を移る

安永八亥年六月十八日大洪水
天明元丑年二月十五日二条城
の宮亟に移る八時頃鳳凰十枚
時後に移る是ハ世間の
世恩賜あり

天明四辰年夏二条城の濠
に移る

天明七未年秋坂城に移る

移る

寛政二戌年夏二条城の宮亟
に移る

寛政四子年六月廿二日禁裏御所
依波守支配

寛延三庚午年八月十日

石川主馬之助義熙願
小笠原左近金田宗女支配

寛保三亥年八月二日没

本所割水野肥前守組　三百俵　石川大之助義陳

後授左馬

宝暦四戌年二月九日西丸新御番与力井尾清右

組

寛延二巳年八月十日

中川数馬忠澄殿
小笠原左近金田宋安支発

寛延二巳年十月仙洞

大御番水野肥前守組　二百石　中川喜左衛門忠要
同　二十俵　後市助

宝暦元未年六月十八日　西丸新御番被仰
七人俵　組

寛延三庚午年八月十日

小笠原源兵衛殿 正伝寺殿

本所番水野肥前守組 寅年 小笠原信濃守殿 文政元戊寅年

二百石俵 小笠原三左衛門殿 改 主水

宝暦元未年八月十八日 寛永新田番祢保田兵衛殿

組

寛延三年八月十日

大御番水野肥前守組 番勤二百六十俵 太田伊織忠勝

忠勝京大坂の宿直に参る

宝暦九卯年十二月十日宿直

十疋せうあるを上れ賜ふ

金一枚つゝ賜ふ

明和三戌年二月十六日老中賜黄金二枚入

高力式部支配

一

国立公文書館
National Archives of Japan

天明元年八月廿四日致仕
天明九年己酉十月十七日死九十一歳

寛延三年八月十日

寛延三庚午年十二月廿二日跡目

本所番水野肥前守組　二百三十俵　外山脩之助正久

外山脩之助正久宿逝
小笠原組金吾家之流
政基之忠

正久京大坂の警衛に出かゝる事
度〳〵
宝暦九卯年十二月十五日正久宿逝
に十世孫のあるを上の聞るれ
少〳〵て美金一枚と賜る
安永八亥年十一月廿四日死五十六歳

寛延三庚午年八月十日

山角定淳 政隆養

小美作守紀伊守加養子

元文四未年九月晦日

大井川水野肥前守通元 二百俵

定淳京大坂於宿所小手之事度々

明和二酉年六月晦日辞入高力式五郎支配

同年十一月廿八日死 四十七歳

寛延三庚午年八月十日

逸見左衛門尉長典改
小笠原左近将監内藤丹後守

寛延二己巳年七月廿九日家督

大神宮水野肥前守組　二百俵　逸見数馬光忠
改左兵衛

光忠京大坂在宿出張等之役
度〻

宝暦十二未年閏十八日新神宮水野肥前組

寛延三午年八月十日

山角六十郎近房家督
小姓信濃筒井門蔵之丞

大御番水野肥前守殿 再勤 二百俵 山角金三郎近忠

宝暦八寅年十一月十八日元方御納戸

寛延三午年八月十日

大御番水野肥前守通五郎 二百俵

田沢右京亮昌名

昌名京大夫儀小姓

度々

宝暦九卯年十二月十五日

乃々宮様上々の御免ニ

黄金二枚

安永八亥年十月八日

辞入

仙石伊豆守支配

安永九子年十二月十九日

致仕

田沢権右衛門昌雄兄

小姓組番頭

[illegible]

同年同月廿四日死六十八歳

八月十日実父宗右衛門
寛延三年庚午八月廿一日

水野宇右衛門忠恵子
小姓役御番七番支配

寛延元辰年十二月三日遠江

大御番水野肥前守組　二百俵　水野富之助忠固

没宇右衛門

忠恵系代濃州の事共
坂城の法令に系る事共
宝暦七丑年秋坂城の法令ふ
系る御義同様とたとも
宝暦十三未年二月六日市ヶ谷門
田ヶ窪乃邸歎ふうを
明和五子年三月十八日病革

御法度を行ひ罪つゝ作と為り
安永六丁酉年四月廿五日病死
御法真淫流紛失のよしに
付て吉田こうち洋
渇を患ひ六月朔日免さる
同月六日支配れとの事に
七月朔日免さる
天明八申年十二月廿五日病死
御法度を行ひ免さる
寛政三亥年七月十四日大御番組頭
寛政五丑年二月二日死六十七歳

八月十日死不出届
寛延三午年九月廿八日
河野九郎兵衛通虎子
小姓組川村左兵衛
寛延元辰年十二月二日家督
大御番水野肥前守組 二百俵 河野一學通虎
通虎京大坂の警衛小番を受
度々
宝暦九卯年十二月十四日病死
十三歳
を始め
安永二巳年八月十九日老病賜黄金三枚
牧野傳蔵支配

安永三年三月十六日死七十歳

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan